水防訓練の成果実る

地下駐車場の冠水防ぐ
利用者も豪雨の中避難

豪雨のたびに冠水の危機にさらされる中央区今泉２丁目のマンション「天神ロイヤルガーデン」（１５階建て＝１０８世帯、２７０名）の地下駐車場は、自主防災会が実施してきた水防訓練の成果が実って、７月中旬の豪雨禍も免れることができました。

直近の訓練はツユに入った６月２０日に実施。防災会の役員や各階のリーダー、それに駐車場の利用者ら約３０名が参加しました。今回の特長は地下駐車場の利用者にも参加を求めたこと。「自己責任が原則」としているものの、豪雨禍の危険が迫っている時にはこれまで理事会の駐車場担当が中心になって車の避難を呼びかけ、一方で役員が駐車場入り口に土嚢を積み上げるなど緊急処置をしてきました。

マンションの駐車場は１世帯１台ずつ計１０８台分の駐車区画がありますが、このうち地下駐車場は２８台分。平成１１年（１９９９年）６月の豪雨時にはマンション前の道路から流れ込んできた濁流で車が冠水の被害に遭いました。

以来、豪雨のたびに冠水の不安に脅かされてきましたが、県西方沖地震被害の復興をきっかけに駐車場入り口に防災扉を設置、土嚢も３０袋を用意し、理事会で対応してきました。

自主防災会ができた２１年３月以降は防災会が中心になって対応しています。７月中旬の豪雨時には防災会の役員らがそれぞれ気象情報に神経を尖らせ、事務局ではエレベーターやロビーに豪雨災害に自主対応を求める貼り紙を出して敷地内への車の避難を訴えました。１４日には、午前３時過ぎまでに全車両が避難を終えたことを確認したのち役員たちが当直警備員の協力で防水扉を閉め、ビニールシートを被せた上から土嚢を積みました。全車避難の後に水防処置を執ったのは、駐車場内へ濁流に混じった土砂が堆積しないよう、これを防止するため。

全車避難でガラ空きになった地下駐車場（7月 14 日午前7時 02 分）

高齢者の防災教室
助け合いの大切さ勉強

いざという時には近所同士の助け合いが大事――西区壱岐南公民館で７月２８日、高齢者の防災教室が開かれました。西消防団壱岐分団長の柴田 親志さんが阪神大震災の記録映像などを教材に、自ら体験した山林大火災の思い出を交えながら、命の大切さを語りました。

制服姿で登壇した柴田さんによると、山林大火災は昭和６１年（１９８６年）４月６日午後、油山で発生。タンク車など５７台と消防署員、消防団員計５５０名以上が出動し、民家に迫りつつあった火勢も１２時間後の深夜になってようやく食い止められた、とのことです。

「命からがらだった」と述懐する柴田さんですが、阪神大地震の火災映像を示して「皆さん、そんな時は逃げのびることだ。絶対に戻ろうとしてはいけない。火勢が増して危険だ」と訴え、さらに県西方沖地震や昨年、今年と相次いだ豪雨災害を振り返りながら改めて「大災害に直面したらバラバラではダメ。強力なリーダーのもと、一緒に行動することが肝心だ」などと強調し、防災と助け合いは不可分の関係にある、との考えを示唆しました。

柴田分団長の話に聞き入る住民たち
（読売新聞西部本社提供）

今夏は結局、駐車場利用者の協力もあって防災の歯車が適切に噛み合い、豪雨禍を免れることができました。今後、予想される台風襲来時の対応を「ぬかりなくやろう」と役員らで話しています（阿）

防災紙芝居人気上昇中
上演希望はご連絡を

あん・あん（安全・安心）リーダー会南支部の防災士仲間が「河上一座」として各地で上演、人気を呼んでいる防災紙芝居「津波だ！ 稲むらの火を消すな」について、南支部は「防災意識啓発にもっと活用してもらおうと」とチラシを作成、市民に呼びかけています。

紙芝居は手製。一座は河上 勝幸、大塚 鞆治、堀田 純子、池田 瑞穂さんら防災士仲間。希望される方は、座長の河上防災士あて 092-565-8503 番（FAX も同じ）へご連絡ください。

2. ぼうさいかみしばい

防災紙芝居

「津波だ！稲むらの火を消すな」

江戸時代の末、1854 年 12 月 24 日（安政元年１１月５日）夕刻紀州広村（現　和歌山県広川町）を大津波が襲った際、庄屋の浜口五兵衛が、刈り取った稲に火をつけて、村人に避難を促して命を救い、その後、私財をなげうって村人と４年がかりで、堤防を築いたという実話をもとにした作品。９２年後の昭和２１年の南海地震で、この堤防が、住民たちを津波から守った。

福岡市の防災ボランティア・博多あん・あんリーダー会南エリア支部の、河上勝幸さん、大塚鞆治さん、堀田純子さん、池田瑞穂さんらが、内閣府が、防災啓発用に監修した素材をもとに「防災紙芝居」を作り、木製の移動用舞台を作り、講談師風の衣装や「わらじ」まで揃えて、学校や公民館など無償で、講演をしています。

現在も残る広村堤防

《防災どんたく２００９》平成２１年３月８日（日）大名小学校体育館にて講演風景

平成２１年１２月１２日（土）三宅公民館にて講演

講演希望の方は、
博多あん・あんリーダー会南エリア支部まで
ご連絡ください。

校区夏まつりに防災テント登場
防災士が救命処置の指導も

東区香椎浜校区の夏まつりが８月７日、香椎浜小学校校庭で催されましたが、博多あん・あんリーダー会の防災士グループも防災テントを張って参加、ひときわ校区民の目を引きつけました。

校区内のマンション「ふようハイツ５―１、５―２」の自治会長でもある東支部長の吉水 恵介・防災士が、自治会の協力もあり中心になって午後から校庭の一角に防災テントを設けました。同支部の会員や他の支部会員・防災士も支援に駆けつけ、防災意識の啓発に一役買いました。

テントには災害資料のほか様々な防災グッズが並べられ、浴衣姿の校区民らが立ち寄って質問するなど関心の高さを覗かせていました。システムがシンプルになったホームスプリンクラーの展示も。

また、水消火器を使った放水訓練をはじめ心肺蘇生法とＡＥＤ（自動体外式除細動器）操作法についても指導、集まった人たちに指導者の資格を持つ防災士が的確にアドバイスしていました。

（広報担当　山本 光男・防災士＝早良支部）

夏まつりに登場した防災テント

あん・あん塾のＤＩＧ講座受け持つ
講師にリーダー会の防災士グループ

さる５月２９日に開講したあん・あん塾の第６期講座も順調に進み、６月と７月には博多あん・あんリーダー会でＤＩＧ（災害図上訓練）の２講座を受け持ちました。

ＤＩＧは「自分たちのまちは自分たちで守る」という基本理念と「災害時における人間関係（コミュニケーション）こそ大切」という認識を学んでもらおうというのがＤＩＧ講座の目的。西部支部の竹尾 宗二・防災士をメーンファシリテータに各支部から多くの防災士が加わって進めました。

受講生たちは、広げた地図に目を這わせながら災害を具体的に想像、真剣な議論を通して防災の道を探りました。

火種なしで非常食を炊き上げ！
化学反応で沸く熱湯を利用

博多支部は大災害などでライフラインに大きな損傷を受けたという事態を想定し，火を使わずに非常食を炊き上げる〝実験〟を行いました。

「災害ランチ試食会」と銘打った取り組み。会場の東光公民館に集まった防災士は９名です。まず、化学反応で沸いた熱湯を、材料の入った容器に注ぎ、２０分かけるとご飯が出来上がるというものです。

火種を使わずに湯を沸かすのが実験の特徴。化学反応によって、例えば５００ccの水が１８～２０分で９３度になりました。

試みたのは白ご飯と味ご飯の２種類ですが、各人の出来具合いはどうか、食べ比べもしました。なかには出来損ないもあったりで笑いを誘っていましたが、まずは平均で合格、という採点。

改善点として分かったことは、お湯を注いだあと①混ぜる②ひっくり返す――の２点でした。

当日、欠席した会員には資料をメール。参考にしてもらうことにしました。

なお、８月２１日には板付公民館で地区の親子２５組、５０名が火種のいらない非常食作りに取り組みました。

（博多支部　安田 哲夫・防災士）

賑やかに非常食を試食する会員達（東光公民館で）

編集後記

勁草（けいそう）という言葉を、ふと防災士に重ね合わせてみました。嵐に腰を折るでもなく、敢然と立ち向かう強い草のことを「勁草」と形容します。

出典は後漢書に出てくる「疾風知勁草」（疾風に勁草を知る）というくだりです。風の穏やかな日には強い草も弱い草も区別がつきませんが、ひとたび疾風が吹き荒れると地べたに叩きつけられる弱い草に対し、茎を震わせながら頭を上げて真っ直ぐに立とうとします。この格言は人間社会に相通じることを示唆しているのでしょう。

逆境（大災害）の中にあって、真価を発揮できる勁草に一歩でも近づけたら---そう想いを巡らす昨今であります。（阿比留）

ハロ～！私は、セキセイインコの
キューちゃん♪これから〝防災新聞〟の
キャラクターとして登場するから
みんなよろしくネ☆